【一】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

高校生くらいになると、理系と文系というように得意分野が分かれてしまう。同級生の中にも異常に数学ができたり、英語が得意であったりする人がいたものだ。

どう見ても、これは脳に得意、不得意な分野があるように思えてくる。

1 大脳の左右の機能が違うということが一般的に知られるようになったのは、アメリカの大脳生理学者、ロジャー・W・スペリーが研究発表してからのことで、わりと最近の話なのだ。

それによれば、右側の脳では視覚的な情報をa ブンセキしたり、地図などの空間的なブンセキ、音楽などを理解し、いわゆるカンといわれる直感的な判断をする。つまり、大ざっぱに把握し、総合的に見て素早く判断していくことにb スグれている。

左脳は言葉（英語）、計算（数学）、論理的なブンセキが得意である。

確かに数学が得意な人は英語もできたかもしれない。そんなふうに考えれば、やはり脳には左右差があり、しかも人によって、［　I　］機能が違うように思える。

右脳はあまり使わないので、それを啓発（*けいはつ）しようというビジネスマン向けの本も多い。

それはそれでけっこうなことだが、それならば、子供がいる人は、2 右脳の能力をあまり評価しない今の受験勉強のスタイルもぜひ見直してほしいものだ。実際の社会では、右脳の直感的な部分は、c ゲイジュツだけでなく営業という仕事でも十分に必要になってくるのだから。

左脳がスグれていると、I*Qは高く出るが、社会で成功（お金を稼ぎ、社会的地位が高いという評価なら）を収めることとIQの値が一致しないのは、3 そうした理由からだろう。

ただ、最近の大脳生理学では、それほど左右の分化はなく、やはり両方の脳を使いながら情報を判断しているという4 分散的な脳の使い方が考えられている。

大脳の機能を理解するには右脳、左脳機能で考えるほうがわかりやすいが、あまりこだわって、自分は左脳人間だとか、右脳人間だとかと決めつけることが、実は一番d キケンなことではないだろうか。

（米山公啓（よねやまきみひろ）『「頭がいい」とはどういうことか』より）

〔注〕

＊啓発…開発。

＊IQ…知能指数。

問一 ═══ 線a～dのカタカナを漢字にしなさい。

問二 ――― 線1「大脳の左右の機能が違う」と対照的な考えの一文を文中より探し、初めの五字を抜き出しなさい。（句読点も字数に含める。）

問三　空欄 Ⅰ に入る最も適切な語句を次から選び、記号で答えなさい。

ア　ずいぶん　　イ　ただ　　ウ　それほど　　エ　やはり

問四　――――線２「右脳の能力」とはどういうことをする能力か、文中から能力についてまとめている箇所を三十字以内で抜き出しなさい。

問五　――――線３「そうした理由」とあるが、そうした理由にあてはまるものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　社会で成功を収めるには左脳の能力が必要という理由。
イ　ＩＱが高いと能力が高いと思って努力をおこたるという理由。
ウ　社会で成功を収めていくには右脳の能力も必要という理由。
エ　左脳が優れていることとＩＱが高いのは関係があるという理由。

問六　――――線４「分散」の反対の意味を持つ熟語を書きなさい。

問七　筆者の主張として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　分散的な脳の使い方をすると両方の脳の機能が高まる。
イ　理系か文系かというように得意分野を分けないほうがよい。
ウ　右脳人間か左脳人間かにこだわるべきではない。
エ　右脳を啓発しようとする本の効果は一時的である。

【二】　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

私は、〈永遠〉という響きにめっぽう弱い子供だった。

たとえば、ある休日。家族四人でくりだしたデパートで、母に手を引かれた私がおもちゃ売場に釘づけになっている隙（すき）に、父と姉が二人で家具売場をぶらついてきたとする。

「あーあ、紀（のり）ちゃん、かわいそう」

と、そんなとき、姉は得意げに顎（あご）をあげて言うのだ。

「紀ちゃんがいないあいだにあたしたち、すっごく素敵なランプを見たのに。かわいいお人形がついてるフランス製のランプ。店員さんが奥から出してくれたんだけど、紀ちゃんはあれ、もう永遠に見ることがないんだね。あんなに素敵なのに、一生、見れないんだ」

永遠に ――――。

この一言をきくなり、私は息苦しいほどの焦りに駆られて、そのランプはどこだ、店員はどこだ、と父にすがりついた。おもちゃに夢中だった紀子（のりこ）が悪いと言われても、見るまでは帰らないと半泣きになって訴えた。

この広大な建物のどこかに眠る素敵なランプ。今、見なければ私は永遠にそれを見ることができない。確かにそこにあるものを、そこに残したまま通りすぎてしまう。それは私の人生における大きな損失に思えた。すごくもったいないし、なんだか不安でもある。そこに残したままのものが増えていくこと、私の知らないものが知らないうちに知らないところへ押しやられていくことに、私は［　I　］ような恐れとさびしさを感じていた。

両親も気づかずにいたこの弱点（永遠に〜できない）を見抜いたのは、後にも先にも三つ年上の姉だけだった。彼女はそれをあますところなく活用し、様々なバージョンで執拗（しつよう）に攻撃をしかけてきた。

「あたし今日、友達んちですっごく貴重な切手を見せてもらったの。すっごく高くて、すっごくめずらしいやつ。（　A　）、紀ちゃんはあれを永遠に見ることがないんだね」

「紀ちゃん、昨日、なんであんなに早く寝ちゃったの？『水戸黄門』最高だったのに。昨日はにせものの水戸黄門が登場して、でもほんとにそっくりでびっくりだったのに。紀ちゃんはもう永遠に、死ぬまであのそっくりさんを見れないんだ」

「今日、二組の斉藤くんが昼休みに生徒会の選挙演説に来たんだけど、途中から斉藤くんコンサートが始まっちゃって、それがすっごい音痴でおかしいの。もう、みんな大爆笑！あたしあれ、一生、忘れないと思う。紀ちゃんは一生、見れないけど」

永遠に。

一生。

死ぬまで。

2　姉の口からそんな言葉が飛びだすたびに、私は歯を食いしばり、取り返しのつかないロスをしてしまったような焦燥（しょうそう）と闘い、でも結局は敗れて、もはや永遠に出会うことのないレアもの切手やニセ黄門様や斉藤くんの歌声のために泣いた。すべてを見届け、大事に記憶して生きていきたいの

に、この世界には私の目の届かないものたちが多すぎた。とりこぼした何かを嘆[b]いているうちに、（　B　）新しい何かを見逃してしまう。

裏を返せば、私がそれだけ世界を小さく見積もっていた、ということだろう。

年を経るにつれ、私はこの世が取り返しのつかないものやこぼれおちたものばかりであふれていることを知った。自分の目で見、手で触[c]れ、心に残せるものなどごく限られた一部にすぎないのだ。（永遠に～できない）ものの多さに私があきれはて、くたびれて観念[d]し、ついには姉に何を言われても動じなくなったのは、いつの頃だろう。

いろいろなものをあきらめた末、ようやくたどりついた永遠の出口。

私は日々の小さな出来事に［　II　］し、悩んだり迷ったりをくりかえしながら世界の大きさを知って、もしかしたら大人への入口に通じているかもしれないその出口へと一歩一歩、近づいていった。

時には一人で。

時には誰かと。

（　森絵都（もりえと）　『永遠の出口』より　）

〔注〕

＊執拗…しつこいこと。

＊焦燥…気があせること。

問一　═══線a～dの読みを答えなさい。

問二　（　A　）・（　B　）にあてはまる言葉の組み合わせとして最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア　A　むしろ　B　たとえば　　イ　A　でも　B　また

ウ　A　そして　B　つまり　　エ　A　けれど　B　やはり

問三　――――線1の「そこ」の指す部分を文中から十字以内で抜き出しなさい。

問四　空欄［　I　］に入る最も適切な言葉を次から選び、記号で答えなさい。

ア　わくわくする　イ　そわそわする　ウ　くらくらする　エ　こそこそする

問五 ――線2とあるが、「私」にはどのような思いがあったからそのような気持ちになったのか。解答欄に合うように文中の言葉を用いて三十字以内で説明しなさい。

問六 空欄 Ⅱ に入る四字熟語を次から選び、記号で答えなさい。

ア 一喜一憂　イ 狂喜乱舞（きょうきらんぶ）　ウ 意気消沈　エ 波瀾万丈（はらんばんじょう）

問七 本文に書かれている内容と一致している文として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 「永遠に～できない」という言葉を繰り返す姉に対して、「私」はあきれはてながらも人生のすばらしさを知り大人への入口に近づいていった。

イ 両親も気づいてくれない「永遠に～できない」という焦燥を「私」はいつもかかえながら生活し、その思いは大人になっても消えることはなくますます募っていった。

ウ 「永遠に～できない」という言葉にすぐ反応していた子ども時代を過ぎ、自分の目で見て、触れるものが多くなるにつれ「私」は世界の小ささを知っていった。

エ 永遠という言葉に弱く「永遠に～できない」と言われると我慢できなかった「私」が、永遠に見られない、知ることのないものの方が人生の中で多いと気づいていった。

【三】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

*南都に、歯取る*唐人ありき。ある*在家人の、*慳貪にして、利養を先とし、事に触れて、商ひ心のみありて、徳もありけるが、虫の食ひたる歯をとらせんとて、唐人がもとへ行きぬ。歯取るには、*銭二文に定めたるを、「一文にて取りてたべ。」と云ふ。小分の事なれば、ただも取るべけれども、1心様の憎さに、「ふつと、一文にては取らじ。」と云ふ。やや久しく論ずる程に、b おほかた取らざりければ、「さらば三文にて、歯二つ c 取りたまへ。」とこそ思ひけめども、3疵なき歯を失ひぬる、大きなる損なり。此は申すに及ばず、大きに愚かなる事、をこがましきわざなり。

ただ、世間の人の利養の心深き、事に触れて利分を思ふ程に、因果の*道理にも知らず、当来の苦報をも弁へず、ただ眼前の幻の利にふけて、身の後の*菩薩の財宝を失ひ、仏法の利を得ざる事のみこそ多けれ。

（『沙石集』　歯とらるる事より　）

*南都（なんと）　*唐人（とうじん）　*在家人（ざいけにん）　*慳貪（けんどん）　*銭（ぜに）　*道理（どうり）　*菩薩（ぼさつ）

利益ばかりを先に考え、何かにつけて、もうけばかり考える心があって、もあった者が、虫が食べた歯を抜かせようとして、のところへ行った。銭二文と決めていたが、「一文で抜いてください。」と言う。わずかな金額のことなので、ただで抜いてもよいのだが、心のあり方が気に入らないので、「決して、一文では抜かない。」と言う。しばらく言い争っている間に、まったく歯を抜かなかったので、「それならば、と言って、虫も食べていない とても良い 加えて、三文支払った。心の中では得をとて、虫も食はぬ、よに良き歯を取り添へて、二つ取らせて、三文取らせつ。2心には利分したと思ったのだろうが、虫歯ではない歯を失ってしまったのは、である。このことは申すまでもなく、みっともないことである。

来世で受ける苦しい報いも考えず、ひたすら目先のはかない利益に夢中になり、死んだ後わからず、御利益を手にしないことばかりが多い。ための財宝を失い、

〔注〕
＊南都…奈良県。京都の「北都」に対する。　＊唐人…唐（中国）から渡ってきた人。
＊在家人…普通の生活をしながら仏教に帰依（きえ）（すがる）する人。
＊慳貪…けちで欲張りなこと。　＊銭二文…江戸時代の貨幣の単位。
＊道理…物事のそうあるべき道筋。　＊菩薩…さとりを求めて修行する。

問一　――――線a、b、cの部分を現代かなづかいに直して答えなさい。

問二　――――線1は、A誰が、B誰の「心様」を憎いと思うのか。次から選び、記号で答えなさい。

ア　唐人　　イ　在家人　　ウ　世間の人　　エ　作者

問三　――――線2について
(1)　何を「利分（得）」と思ったのか。四十字以内で説明しなさい。
(2)　このように考えることを後半では何と表現しているか、文中より六字で抜き出しなさい。

問四　――――線3の「大きなる損」とは、何かを失ったことであるが、何を失ったのか、文中より五字以内で答えなさい。

問五　この作品『沙石集』は、鎌倉時代の作品であるが、次から同じ鎌倉時代の作品を選び、記号で答えなさい。

ア　古今和歌集　　イ　徒然草　　ウ　源氏物語　　エ　枕草子

【四】次の各問いに答えなさい。

問一　次の①～⑤の作品や文学者の読みを書きなさい。

①万葉集　②方丈記　③松尾芭蕉　④森鷗外　⑤太宰治

問二　次の①～⑤の□には同じ漢字が入る。その適当な漢字を書きなさい。

①以□伝□（黙っていても心が通じ合うこと。）
②□信□疑（本当かうそか迷うこと。）
③□朝□夕（短い期間。）
④□業□得（行いは必ず帰ってくる。）
⑤□人□色（好みや考えなどは、人によってそれぞれみな異なるということ。）